

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.9（2013年3月号）◆

購読会員の皆さま限定のニュースレターも第9号となりました。「Intelligence」会員専用ウェブサイトとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【『Intelligence』13号のご案内】

『Intelligence』13号は、3月末の刊行を予定しております。

<目次>

◇特集：日米広報外交とアジアの情報戦

- ・ナンシー・スノウ（訳：羽生浩一）：真実は最良のプロパガンダ——エドワード・R・マローと JFK 施政下の米国文化情報局（USIA）
- ・土屋由香：アメリカ情報諮問委員会と心理学者マーク・A・メイ
- ・梅森直之：江藤と対日文化政策（仮題）
- ・小林聡明：帝国日本の広報文化外交と東アジア——カーネギー財団主催米国記者団東洋視察に焦点をあてて
 - ・宮杉浩泰：張鼓峰事件における日本陸軍の情報活動
 - ・米濱泰英：“米ソ提携”に日本軍はどう対応したか——第二次大戦勃発からソ連軍の満洲侵攻まで

◇特集：占領期メディア再考

- ・川崎賢子：GHQ 占領期における「文楽」の変容——「古典」になること
 - ・佐藤香里：GHQ/SCAP の文化政策と美術——CIE 美術記念物課の人事と文化財保護
 - ・石川巧：被爆者はどこに行ったのか？——占領下の原爆言説をめぐって
 - ・山本武利：CCD 日報ガイド
- ・土屋礼子：CIE の組織とウィークリーレポート（仮題）

◇一般論文

- ・牧義之：国立国会図書館所蔵検閲関係資料・<特 500>資料群に関する基礎的研究
- ・小野耕世：「日曜報知」時代の小野佐世男

◇資料紹介

- ・小林宗之：海外での「tsunami」初出について——『HARPER'S WEEKLY』1896年8

月 8 日号における地震津波報道から

●次回研究会は、3月30日(土)です。以後、4月27日(土)・5月25日(土)・6月29日(土)の予定です。ご報告を御希望の方は、20世紀メディア研究所事務局まで、メールにてご一報下さい。m20th@list.waseda.jp

【今月のコラム——米国国立公文書館と中国人研究者】

ワシントン DC での滞在も残り少なくなってきた。これまでやり残した課題を片づけるべく、連日、国立公文書館 (NARA) 通いを続けている。毎年、2~3月には、日本からの研究者を数多く見かける。ただ、最近、ちょっとした「異変」を感じている。大陸から訪れる中国人研究者が、目に見えて増えていることである。これまで在米の中国人研究者をのぞいては、大陸からの研究者をほとんど見かけなかった。この1~2年の中国人研究者の増加は、彼ら・彼女らがアメリカの一次史料を積極的に活用し始めていることを示している。

一方で、中国の档案館は、残念な方向に向かいつつある。筆者もしばしば利用する北京の外交档案館は、中国のなかでも開放性の高い档案館として、研究上、きわめて有用であった。だが、昨年あたりから、利用が難しくなり、公開されていた史料のなかから、非公開の措置がとられるものも出始めている。NARA での中国人研究者の増加が、中国での史料公開状況とどのように連動しているのかを判断するのは、時期尚早であろう。ただ、中国での歴史学研究において、以前よりも多様性が生まれてはいるものの、一方で何らかの方向性、あるいは戦略がまとわりついているようにも思われる。経済や政治だけでなく、学術の側面でも、しっかりと中国を見ていくことが必要であろう。

[3月15日付文責：小林聡明]